

「健全な精神は健全な身体に宿る」
—チャールズ・キングズリーの宗教思想とダーウィン流進化論との
交錯をめぐって—

福田 泰久

外国語教育講座

“A Sound Mind in a Sound Body”:
An Intersection Between Charles Kingsley’s Religious Thought and
Darwin’s Theory of Evolution

Yasuhisa FUKUDA

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1

「健全な精神は健全な身体に宿る」という人口に膾炙した言い回しを、『精選版 日本国語大辞典』は「からだ健康であれば、精神もそれに伴って健康であるの意」と定義している。この定義を素直に読めば、「からだ健康であれば」という条件が付されていることから、まず身体の健全さが前提にあり、これを踏まえて精神の健全さが想定されていることがわかるだろう。身体と精神が先後の関係で定義されていると言い換えても良い。

翻って、「健全な精神は健全な身体に宿る」というこの同じ言い回しで『教育に関する考察』(*Some Thoughts Concerning Education*, 1693)を始めるジョン・ロックは、健全な精神と健全な身体の両方を兼ね備えた者はそれ以上望むものはほとんどなく、いずれかを欠いている者は、他にいかなるものを持っていても、それを埋め合わせることはできない、と十全たる心身の重要性を説いた後、さらに次のように言葉を繋ぐ。曰く、「精神が賢明に正しく導かない者は決して正しい道を歩めず、身体が衰え、衰弱した者は正しい道を進むことはできない」(Locke 1)と。すなわちロックにあっては、心身はあくまでも同列の関係にあり、先後や優劣によって捕捉されるものではないのである。

同じ言い回しにも拘わらず、これら2つの解釈に生じている「ずれ」は、ヴィクトリア朝中期を代表する小説家、社会改良家、そして英国国教会牧師のチャールズ・キングズリーにあっては一層複雑化する。本稿は、キングズリー後期の代表作の1つである『水の子』

(*The Water-Babies*, 1863)を主なテキストに、この言い回しのずれを、キングズリーの奉じた宗教思想である自然神学および筋肉的キリスト教¹とチャールズ・ダーウィンによる進化論との弁証法の帰結として措定する試みである。

2

「健全な精神は健全な身体に宿る」という言い回しの出典は、ローマの風刺詩人ユウェナーリスの『風刺詩』(*Saturae*, 110?-27?)であるとされる。性的倒錯者、災厄、女性的美德、知識人等、全16巻の各巻で1つのテーマが取り上げられる同書において、“Orandum est, ut sit mens sana in corpore sano” [your prayer must be that you may have a sound mind in a sound body] (Juvenal 155)という当該の言い回しは、「人間の欲望の虚しさ」と題された第10巻356行に登場する。雄弁や名声等を神に祈願したせいで非業の死を遂げ、あるいは晩節を汚すことになった歴史上の人物を取り上げ、それでも神に何かを願うのであればせめて慎ましく健全な身体に健全な精神を与え給えと祈ることを説いている。以下、該当箇所を含めた残りの詩行を引用しておく。

[Y] our prayer must be that you may have a sound mind in a sound body. Pray for a bold spirit, free from all dread of death; that reckons the closing scene of life among Nature’s kindly boons; that can endure labor, whatever it be;

that deems the gnawing cares of Hercules, and all his cruel toils, far preferable to the joys of Venus, rich banquets, and the downy couch of Sardanapalus. I show thee what thou canst confer upon thyself. The only path that surely leads to a life of peace lies through virtue. If we have wise foresight, *thou*, Fortune, hast no divinity. It is we that make thee a deity, and place thy throne in heaven! (Juvenal 155)

こうしてみると、ユウェナーリスと先に紹介した2つの例の間にはいささかずれのあることがわかるだろう。冒頭の“you may have a sound mind in a sound body”という言い回しだけを見れば原典もロック同様、心身を同列に置いて論じているようだが、上記引用の2行目以降のくだりに明らかなように、原典は死の恐怖を断ち、人生の最期を自然の恵みとみなし、いかなる骨折りにも耐える精神を祈願せよと言うのみで身体にはそれ以降言及がない。つまり、ユウェナーリスは身体よりもむしろ、泰然自若として生きる唯一の道である徳 (virtue)、ないしは思慮深い洞察 (wise foresight) の源泉たる精神をこそ祈願せよと述べているようにも読めるのである。

3

見てきたように、3つの例は身体と精神のいずれに強調点を置くかで異なっていた。『精選版 日本国語大辞典』(のみならず、日本で流通している多くの辞典もそうだが²⁾)では身体に強調を置く一方で、ロックは身体と精神を同列に捉え、原典であるユウェナーリスでは精神にその強調点をずらしているように解釈できた。

それでは、キングズリーは当該の言い回しを『水の子』においてどのように紹介しているのだろうか。第3章、ハーソヴァー屋敷の令嬢エリーから泥棒と間違われ、這う這うの体で逃げ出した煙突掃除夫の主人公トムは、清くなることを願う川に沈んでゆく。トムが生まれ変わることになる「水の子」という存在に理屈をつけるため、語り手＝キングズリーは「生まれるとは眠ること、忘れること」と、ウィリアム・ワーズワスの「不死の暗示のオード」を引用しつつ、この詩に歌われている感覚をただ受入れよと読者に迫る。この際、加えてキングズリーが読者に提示するのが身体と精神の問題である。

But if I was you, I would believe that. [...] [A] nd instead of fancying, with some people, that your body makes your soul, as if a steam-engine could make its own coke; or, with some

other people, that your soul has nothing to do with your body, but is only stuck into it like a pin into a pin-cushion, to fall out with the first shake; - you will believe [...] that your soul makes your body [...]. (Kingsley, *The Water Babies*, 80)³

自墮落で衛生観念に乏しかったトムが水の子となり、キリスト教徒にふさわしい振る舞いを水中で身に付けることで、大団円で再び人として生まれ変わるある種のビルドゥングスロマンの物語において、語り手は軽口を叩きながらも身体を形作るのは精神であって、決してその逆ではないことを強調する。その具体例は作品全体に散りばめられているが、ここでは棘だらけになるトムの逸話と、哀れな末路をたどるスキナヨニスル人 (the Doasyoulikes) の逸話を取り上げよう。

大妖精オウホウ (Mrs. Bedonebyasyoudid) 夫人から貰ったお菓子が忘れられないトムは、夫人の留守を狙ってお菓子をこっそり口にしてしまう。1つだけなら気づかれまいだろうという当初の気おくれは、2つ、3つと手を伸ばすうちに麻痺してしまい、はっと我に返った時にはお菓子はすべてトムの腹の中、後に残ったのは苦い罪悪感だけとなる。翌日、他の水の子たちとお菓子をもらいに行く段になり、トムは恐る恐る大妖精の前に出るが、大妖精は見透かしたように睨めつけるだけで特に何も言わず、他の子と同じようにトムにもお菓子をくれたのだった。だが、そのお菓子はいつもと違いひどく嫌な味がした。そこでトムが自分の身体を見てみると、

[H] e was all over prickles, just like a see-egg. Which was quite natural; for you must know and believe that *people's souls make their bodies*, just as a snail makes its shell (I am not joking, my little men; I am in serious, solemn earnest). And, therefore, when Tom's soul grew all prickly with naughty tempers, his body could not help growing prickly too, so that nobody would cuddle him, or play with him, or even like to look at him. What could Tom do now, but go away and hide in a corner, and cry? For nobody would play with him, and he knew full well why. (202, Italics mine)⁴

トムの成長はその意志とは無関係に決められている宿命論的なものでは決してない。むしろ、その行く末は今後トムがどのような道徳的選択をし続けるかにかかっていると見てよい (Beaty et al. 143)。

もう1つの事例として、オウホウ夫人が劇中劇の形でトムに語って聞かせるスキナヨニスル人の歴史ははず

と凄惨である。イキアタリバツタリ (Happygolucky) 山の麓で、スキナヨウニスル国の人たちは無為徒食の日々を過ごしている。大妖精は山から煙を出したり、火山灰や溶岩を配置するなどしてこの山が活火山であることを折に触れて知らせるのだが、彼(女)らはこの地を離れ快適な暮らしを手放すことに躊躇いを見せる。それから2000年の間に噴火に伴う人口減によりスキナヨウニスル人は衰退の一途を辿るも、彼(女)らはこの地から離れようとせず、木の実や草の根を齧って生きながらえている。だが、生態系の変化によりライオンが地上を徘徊するようになってからはそれさえ叶わず、「木の上に引っ張り上げてもらうため女は力の強い獐猛な男と結婚しよう」と(218)したせいで、次第に「強くてすばしこい連中」(218)が樹上で暮らすようになるのだ。次の1500年の間に氷河期に入り、耐寒性のある者と樹上という生活環境に適応した者だけが種を残した結果、「女たちは皆毛むくじゃらな男と結婚したが、毛むくじゃらな子どもを産みだした」(219)。かような自然選択と性淘汰の帰結として、スキナヨウニスル人は次のような最期を迎える。

“They have almost forgotten, too, how to talk. [...] I (Mrs. Bedonebyasyoudid) am afraid they will all be apes very soon, and all by doing only what they liked.” And in the next five hundred years they were all dead and gone [...] except one tremendous old fellow with jaws like a jack [...] and M. Du Chaillu came up to him, and shot him, as he stood roaring and thumping his breast. And he remembered his ancestors had once been men, and tried to say, “Am I not a man and a brother?” but had forgotten how to use his tongue [...]. So all he said was, “Ubbobool!” and died. And that was the end of the great and jolly nation of the Doasyoulikes. (220-21)

ダーウィン流進化論では、変異の蓄積が自然に選び取られたという意味で退化も進化の一種である。進化であれ退化であれ、種の変化はあくまでも環境による適応という無差別的かつ無方向的な法則に従った結果に過ぎない。だが、Haleも指摘するように、スキナヨウニスル人をめぐる自然選択や性淘汰の描写から、おそらくキングズリーはダーウィンの進化論をある程度正確に理解した上で (Hale 167) あえて誤読していた節がある。別言すれば、進化と退化に実際には存在しない人間中心主義的な優劣の観念を導入し、現世において積んだ功德の多寡によって進化と退化が決定されるような神学思想を念頭に置いて曲解していた節があるのだ。⁵

ダーウィンの進化論はおおよそ1870年代頃には「新たな聖職者」(Dewitt 51)として自然神学にとって代わったと言われるが、キングズリーはあえて時代の潮目に鈍感でいることを選択したようだ。というのも、『水の子』出版から8年後の1871年、ロンドンのシオン・コレッジで「未来の自然神学」(“The Natural Theology of the Future”)と題する講演においてキングズリーが聖職者に促したのは、「現代の科学的事実に向き合う必要性」であり「科学と信条を調停するという偉大な仕事を受け入れる」(Kingsley 1899, 290)ことだったからである。世を席卷するダーウィン、生物学者のトマス・ヘンリー・ハクスリーら不可知論者を尻目に、「進化があるのなら、進化させる者がいるはずである」(Kingsley 1885, 330)と強弁し、キングズリーはその態度を軟化させることはなかった。

4

無論、キングズリーのこうした態度は聖俗の主導権争いに関わるものでもなければ、まして特定の個人に対する敵愾心から発するものでもない。「伝わらない物語を綴るということ — 『水の子』と吃音者キングズリー」(2016)において、筆者はキングズリーが生涯悩まされた吃音を道徳的退廃と捉え(モラルの低下により最終的に発話困難となったスキナヨウニスル人を参照せよ)、神意に沿う行動を心掛けることで吃音という「退化」の状態を脱するため、ダーウィンの進化論と自身の奉じる筋肉的キリスト教によって吃音治療を模索した節があることを明らかにした。つまり、(理想的なキリスト教徒たるべく不断の努力を行う)精神が(吃音のない)身体を形作るのだ。翻って本稿では性愛・結婚の言説から精神と肉体の問題を捉え返してみたい。

見てきたように、キングズリーは道徳法則と物理法則を意図的に混同する。加えてトムは「身体の健康、良識、生命の最も単純な法則」(Kingsley 1880, 300)である衛生原則を水中で学び直すのだが、こうしたキングズリーによる自然法則の擁護が2つの点で性役割に影響するとローラ・ファジックは指摘している。1つは男女の両性モデルの受容、もう1つは神が創造した物理的実体に対して覚える畏敬の念には健全な性愛が含まれるという信念である (Fasick 92)。ファジックは詳しく述べていないが、ここで念頭に置いているのは恐らく『創世記』冒頭の記述とみて間違いないだろう。すなわち、神が人を男と女とに創造された、という1章27節の記述と、人は妻と結び合い一体となる、という2章24節の記述である。⁶ その結婚にかかる問題について、キングズリーは1848年に知己を得たチャーティスト運動家で詩人のトマス・クーパーに宛てて次のようにしたためている。

'In the beginning God created them male and female.' This, when taken with the context, can only be explained to mean — a woman for each man, and a man for each woman. This binary law of man's being; the want of a complementum, a 'help meet,' without whom it is not good for him to be, and joined to whom *they two became one being of a higher organisation than either had alone* [...]. (Kingsley 1910, 151 Italics mine)

チャーティスト運動に翳りが見え始めた1848年、キングズリーはハンガリー王女の聖女エリザベートとその告解師コンラート・フォン・マールブルクを描いた詩劇『聖者の悲劇』(*The Saint's Tragedy*)を出版する。禁欲主義を掲げ、婚姻・性交により子孫を産み・増やすことを悪の棲家たる肉体の創造であるとして忌避したマニ教に対する強い反発から執筆された同書は、「精神的充足としての性的結合」(Rosen 24)が重要なメッセージとして前景化される。書簡のなかでクーパーと応酬を交わした結婚問題が具体的に何を指すのかは残念ながら定かではないものの、そのやり取りの内容や1848年という時期から、『聖者の悲劇』が2人の共通のトピックであった蓋然性はかなり高いと思われる。このことを踏まえて先の書簡に戻ると、『創世記』1章27節の文言を引きながら、キングズリーは結婚前の独身の段階と比べて男と女が結婚して夫婦となることで、より高次の存在となりうることを、曲解した進化論のアナロジーのもとで思考していることがわかる。逆に言えば、独身主義によって結婚生活が阻害されることで、「神から与えられた世界に対する不敬な軽蔑に基づく抑圧された性欲は [...] 肉体的・道徳的劣化を引き起こす」(Fasick 92)のである。

それでは、性愛・結婚の言説において精神と身体の関係をどのように措定すればよいだろうか。伝記作家のスーザン・チティがキングズリーとファニーとの間で交わされた300通に及ぶ私信を発掘して以降、とりわけ結婚に至るまでの2人の赤裸々なやり取りが明らかになったが、結婚前年の1843年、キングズリーは将来の妻に宛てて以下のような奇妙な依頼をしている。

'Darling, one resolution I made in my sorrow, that I would ask a boon of you and I wish to show you and my God that I have gained purity and self-control, that intense though my love is for your body, I do not love it but as an expression of your soul. And therefore, when we are married, will you consent to remain for the first month in my arms a virgin bride, a sister only?' (qtd. in Chitty 81)

ファニーの身体と精神を俎上に載せ、キングズリーは身体そのものではなく、精神の具現としての身体こそを愛すると述べる。これは初夜の床を夢想するキングズリー流の照れ隠しなどといったものではない。そうではなく、性的結合を先延ばしにすることでその関係性は純化し、2人はより高次の存在へと駆け上がるのだ。

このように心身が不可分の関係にある場合、キングズリーの退化理論 (degradation theory)⁷ は、トムやスキナヨウニスル人がそうであったようにとりわけ苛烈な結果を招く。時事評論「ロンドンのナウシカ」("Nausicca in London" 1873)でキングズリーは「女性の礼節とはその人の内面的・精神的な優美さ [...] を外見的・視覚的に示すものであり [...] その人の生来の素質から本能的に流れ出てくるもの」(Kingsley 1880, 114) だと言った。であるとすれば、19世紀後期ロンドンの無教養な女性たちの道徳的退化と身体的退化の傾向 (ibid. 126) を嘆いてみせるキングズリーにあっては論理的に道徳的退廃が礼節の棄損につながり、身体的退化とジェンダー規範からの逸脱が不可避免的に結びついてしまうのである (Fasick 98)。

それではこれらの理論的枠組みをもって、『水の子』において性愛ないし結婚の言説は精神と身体の見点からどのように措定されうるだろうか。『水の子』において結婚に関する逸話は3例登場する。登場順に、先にも言及したスキナヨウニスル人、名家の生まれで絶滅の危機に瀕しているペンギンの老婆、そしてエピメテウスとパンドラ夫妻である。

スキナヨウニスル人については既に見たためここでは割愛し、第7章でトムが輝きの壁 (Shiny Wall) へ向かう道すがら出会うペンギンの老婆についてまず考えてみよう。地殻変動に巻き込まれヒトリボッチ岩 (Allalonestone) に一羽取り残された老婆のペンギンが「近頃では、成り上がり者たちは誰もかれも翼をくっつけて飛びたがる。相応の場所を離れて飛び上がって一体何がしたいのやら」(230-31) と語るように、彼女を精神的に支えているのは翼のない名家の出という誇りである。皮肉なのは、名門の出という心理的足枷から環境に適応できないために彼女が絶滅の危機に瀕していることだ。絶滅から逃れる機会がなかった訳ではない。だが、義兄 (亡くなった姉の夫) からのプロポーズという絶滅から逃れられる千載一遇の機会さえ、彼女は家の体面を守るため逸してしまう。スキナヨウニスル人のところでも見たように、敵意に満ちた世界で身を守ってくれる男性を適切に選択する (218) ことこそが、キングズリーにとっての理想の性選択であるとすれば、老ペンギンは翼を持たない身体的退化と併せて、適切なタイミングで男性に身を委ねることを忌避したジェンダー規範からの逸脱によって、その絶滅は不可避となる。

次に、エピメテウスとパンドラ夫妻に移る前に、ト

ムが第8章で出会う年寄りの巨人について見ておこう。右手には昆虫採集の網、左手には鉱物採集のハンマーを持ち、ポケットに採集瓶、顕微鏡、望遠鏡、ピンセット等ありとあらゆるものを詰め込んだこの老巨人は、「それがなんだかわからないが、わしにはしなければならないことがある。[…] 目の前にある仕事をせよ […] それがわしのモットーなのだ」(277)と語る。その風態に加えてトマス・カーライル譲りの過剰な行動主義から、恐らくこの老巨人は玄人はだしの博物学者で筋肉的キリスト教徒のキングズリー自身を模していると思われるが、彼はどういう訳か「前向きではなく、後ろを向いてまっしぐらに走って」(274)いる。その理由を尋ねられた彼はトムにこう答える。「わしはエピメテウスの子孫だからね。後ずさりでなければ前に進めないのだ」(277)と。

輝きの壁を通り、平和の入江 (Peacepool) でトムは森羅万象を差配するマザー・ケアリー (Mother Carey) と対面する。彼女は最終目的地である世界の果てのまた果て (the Other-end-of-Nowhere) へ至る道を、トムに後ずさりで進むよう指示するのだが、途方に暮れるトムに語って聞かせるのがプロメテウスとエピメテウスの兄弟の逸話である。この逸話はキングズリーお気に入りのテーマの1つだったようで、1869年10月にクリフトン・コレッジのパブリック・スクールにて行った講演でも言及している。

“For if the higher education is not built on the knowledge of Nature and Fact, which are, as Bacon says, the voice of God himself revealed in things, you may train a generation of fanatics, bigots, dilettanti, pedants, mandarins, or other children of Prometheus, the *à priori* dreamer: but you will never train your young people into children of Epimetheus, the inductive and therefore truly practical philosopher, into men and women who, taking their stand on Nature and on Fact, know something of what can be done in this strange world wherein God has placed them, and something of how to do it. No one is more deeply, yea awfully, convinced than I am of the need of sound religious teaching.” (Kingsley 1877, 303)

一般的に、先見の明を示す兄プロメテウスに比べて、後知恵を示す弟エピメテウスの世評は高くない。だが、キングズリーは過去を振り返らず、遠い未来を虚しく見つめ続けるプロメテウスを演繹的な哲学者として読み換える一方で、過去に目を凝らすうちに経験を重ね、典型的な事象のパタンを見出すことで科学者として大成するエピメテウスを、帰納的哲学者として読み換え

る。当時の多くの知識人同様、熱心なベーコン主義者だったキングズリーは経験の積み重ねから物事の道理を見極めるエピメテウスをとりわけ高く評価した。したがって、「男なら誰でも良い妻を得る機会があればいつでもそうすべきであるように、エピメテウスも美しいパンドラと結婚した」(256)のは、キングズリーにあっては当然の帰結なのであって、それは、エピメテウスとパンドラの夫妻が物語において唯一成功した結婚の事例であることからもうかがえる。

エピメテウスやその子孫の老巨人同様、トムも後ずさり精神陶冶の旅を続ける。個別具体の法則を積み上げていくことで一般法則を導くのが帰納法の特徴の1つであるとすれば、『水の子』を構成する過剰なラブレリックのエピソードの数々はキングズリーの考えるキリスト教徒の理想像を導出するための個別具体の事象である。そして、論理学の教科書が私たちに教えてくれるもう1つの重要なことは、帰納法においては個別具体の法則が真であっても一般法則が必ずしも真にはならないということだ。無論、キングズリーにもそのことはわかっていた。だからこそ彼は、物語の大団円において再び人間へと生まれ変わったトムとエリーを結婚させることは絶対になし (308)、『水の子』という物語を、「始めに言ったように、これはお伽話だ。おもしろおかしく書いた作り話だ。だから、もしお話が本当だとしても一言だって信じる必要はないのだよ」(310)という自家撞着のような言葉で締めくくるのである。

本稿は「健全な精神は健全な身体に宿る」という言い回しをめぐって、キングズリーがダーウィン流進化論を援用して心身二元論をどのように措定しているかを、主として『水の子』を通して検討した。独自の退化理論によって心身の在り方を規定し直し、理想的なキリスト教徒へ肉薄しようとするキングズリーは「健全であるにはあまりにも率直にすぎる」(Houghton 377)がゆえに、「健全な精神は健全な身体に宿る」という言い回しはいと容易に「不健全な精神は不健全な身体に宿る」という言い回しへと反転する可能性をつねに孕んでいる。ただし、この点については本稿では扱えなかった論敵ジョン・ヘンリー・ニューマンとローマ・カトリックについての問題、それに関連してジェームズ・アダムズが指摘する、キングズリーが「男らしさ」に対置する「女々しさ」という特性を、そもそもキリスト自身やキリスト教が慈愛や柔和という形で内包しているジレンマ (Adams 81) をいかに解消しうるのか等と絡めて改めて論じ直す必要があるだろう。

注

1. デイヴィッド・ニューサムは筋肉的キリスト教を “the duty of patriotism, the moral and physical beauty of athleticism, the salutary effects of Spartan habits

- and discipline; the cultivation of all that is masculine and the expulsion of all that is effeminate, un-English and excessively intellectual” (Newsome 216) と定義する。
- 例えば『広辞苑』第6版は「身体が強健であってこそ精神も健全である」と、また『故事俗信ことわざ大辞典』第2版は「からだ健康であれば、精神もそれに伴って健康である」と定義し、いずれも身体を前提に置いて定義している。
 - テキストはCharles Kingsley, *The Water-Babies: A Fairy Tale for a Land Baby*. London: Macmillan, 1885を使用した。以下、同書からの引用は括弧にページ数のみを記す。
 - カタツムリと殻の関係は『水の子』が初出ではない。「魂は、カタツムリが殻を分泌するように、その体を分泌する。その身体は、その生物が到達した発達段階を物質的に表現したものにはほかならない」(Kingsley 1878, 143-44) と、『水の子』出版から遡ること約半年前の1862年10月、キングズリーはオックスフォード大学リネカー動物講座教授のジョージ・ロレストンに宛てた書簡において、自身の退化理論 (degradation theory) への理解を示すロレストンに礼を述べつつ、改めて自説を展開している。
 - そもそもケンブリッジ大学でキリスト教神学を学んだダーウィンは、その理論的背景として、時計職人のアナロジーで有名な18世紀の神学者ウィリアム・ペイリーの自然神学に多くを負っている。そのため、こうした曲解を可能にさせる一因として、ジリアン・ピアも述べるようにダーウィンによる (少なくとも『種の起源』初版における) 擬人的な「自然」の書きぶりがある (Beer 63)。選択のエージェントとしての自然の人為性が、自然と森羅万象を差配する全能の神との境界を曖昧にし、その曖昧さが、なんらかの秩序や体系を有しているところに神のデザインを見る自然神学とダーウィンの進化論を交錯させるのである。
 - しばしば指摘されることだが『創世記』1章と2章で2度創造されるヒトの異動についてはここでは深く取り上げないこととする。キングズリーもこの箇所を詩人トマス・クーパーとの1848年の書簡の中で言及しているが、特にその矛盾には触れていない。Kingsley 1910, 149を参照せよ。
 - Kingsley 1877, 144を参照せよ。

引用文献

- Adams, James Eli. “Effeminate: Kingsley and the History of an Epithet.” Conlin et al. 72-85. Print.
- Beatty, John and Piers J. Hale. “Water Babies: an evolutionary parable” *Endeavour*. 32. 4 (2008): 141-46. Print.
- Beer, Gillian. *Darwin’s Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 2009. Print.
- Chitty, Susan. *The Beast and the Monk: A Life of Charles Kingsley*. London: Hodder and Stoughton, 1974. Print.
- Conlin, Jonathan et al. *Charles Kingsley: Faith, Flesh, and Fantasy*. London: Routledge, 2020. Print.
- Dewitt, Anne. *Moral Authority, Men of Science, and the Victorian Novel*. Cambridge: Cambridge UP, 2013. Print.
- Fasick, Laura. “Charles Kingsley’s Scientific Treatment of Gender.” Hall 91-113. Print.
- Hale, Piers J. “Charles Kingsley and the Evolution of Man and Morals in *The Water-Babies*.” Conlin et al. 159-83. Print.
- Hall, Donald E. ed. *Muscular Christianity: Embodying the Victorian Age*. Cambridge: Cambridge UP, 2006. Print.
- Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*. New Haven: Yale UP, 1957.
- Juvenal. *The Satires of Juvenal*. Trans. Lewis Evans. Philadelphia: D. MacKay, 1896. Print.
- Kingsley, Charles. *Charles Kingsley: His Letters and Memories of His Life*. Kingsley, Frances Eliza Grenfell, ed. Vol. 1. London: Macmillan, 1910. Print.
- . *Charles Kingsley: His Letters and Memories of His Life*. Kingsley, Frances Eliza Grenfell, ed. Vol. 2. 1877. Cambridge: Cambridge UP, 2011. Print.
- . *Charles Kingsley: His Letters and Memories of His Life*. Kingsley, Frances Eliza Grenfell, ed. Vol. 2. London: C. Kegan Paul, 1878. Print.
- . *Charles Kingsley: His Letters and Memories of His Life*. Kingsley, Frances Eliza Grenfell, ed. Vol. 2. NY: J. F. Taylor, 1899. Print.
- . “A Mad World, My Masters.” Kingsley, *Sanitary and Social Lectures and Essays*. 269-300. Print.
- . “Nausicca in London; or, The Lower Education of Women.” Kingsley, *Sanitary and Social Lectures and Essays*. 105-27. Print.
- . *Sanitary and Social Lectures and Essays*. London: Macmillan, 1880. Print.
- . *Scientific Lectures and Essays*. London: Macmillan, 1885. Print.
- . *The Water-Babies: Fairy Tale for a Land-Baby*. London: Macmillan, 1885. Print.
- . *Yeast: A Problem*. NY: Harper, 1851. Print.
- Locke, John. *Some Thoughts Concerning Education*. Cambridge: Cambridge UP, 1889. Print.
- Newsome, David. *Godliness and Good Learning: Four Studies on a Victorian Ideal*. London: Cassell, 1988. Print.
- Rosen, David. “The volcano and the cathedral: muscular Christianity and the origins of primal manliness.” Hall 17-44. Print.
- 北村孝一編。『故事俗信ことわざ大辞典』第2版。東京：小学館，2012。Print。
- 小学館国語辞典編集部編。『精選版 日本国語大辞典 第巻』。東京：小学館，2006。Print。
- 新村出編。『広辞苑』第六版。東京：岩波書店，2008。Print。
- 福田泰久。「伝わらない物語を綴るということ —『水の子』と吃音者キングズリー」『英語英文学研究』。第60巻 (2016) 23-37。Print。

(2022年9月26日受理)